

# あんげろす

ふるさと

吉田忍

高校の先輩は上野駅に懐かしいふるさとのなまりを聞きに行ったという。ふるさとが帰るにはあまりに遠くにあったからであろう。そして実際、遠いのである。彼のふるすとは私のふるさとと同じ岩手、しかも隣々村なのでこの遠さは心底しみじみと分かる。どのくらい遠いか。私が子どもであった頃のことではあるが、東京では正午に放送が始まる「笑っていいとも！」なる番組が岩手では夕方4時に始まった、といえお分りになるだろうか。東京から岩手に電波が届くのに4時間はかかったということで、電波の速さをおよそ30万キロ毎秒とすれば、当時、東京と岩手の距離は43億2000万キロメートルくらいはあったということである。

そんなホラ話をするなどと思われる方もいるかも知れない。しかし、私がたとえふるさとに帰ったつもりであっても、山のかたちも川のかたちもかわり、そこに住む人たちもかわり、もはや住んでいない人たちもいて、となると、ふるすとは実はたどり着いてはいないのかも知れない。とすると、今は東京に住む身となった私が、ふるすとは海王星ほど先にある、と言うのもあながちホラとばかり言えないのではないだろうか。

私がふるさとを出たのはそこが気に食わなかったからで、そんな気に食わなかったふるさとを今になって懐かしく思うのはずいぶんと身勝手なことではある。しかし、ふるすとはそんな私の身勝手さなんか気にせず遠くであって、明日にはさらにずんずんと遠くへと離れ行く。私はそんな遠く離れ行くふるすとにたまにぼんやりと目をやったりする。

よしだ・しのぶ（所員）

第99号

2026年3月



## 社会変動の中の世俗化とキリスト教

佐藤正晴

私たちの社会は、不断の状況化を特徴としている。社会における制度や機構が、人間によって担われ、不断の変動過程にあると認識されている。伝統的なキリスト教は、一般的な社会の変動態の中で、自分の課題をどのように果たそうとしているのであろうか。

ところで、キリスト教は聖書の使信に基礎を置くがゆえに、確固不変ということはない。私たち人間によって、歴史的に把握されなければならないものである。神の言葉が歴史的に生起する限り、その表現形態に至るまで時代の制約を受ける。このような場では、聖句の引用を重ねれば、時代の問題に対して解答が得られるということはない。

それにもかかわらず、キリスト教が、この社会に対して、新しい衝撃を与えたとしたら、それはどのようなかたちであらうか。まず、キリスト教は新しい何ものかを提示し得るのであろうか、これが問題かもしれない。

工業化され技術化した現代社会は、しばしば世俗化の名で呼ばれている。世俗化とは、普通、超自然的な原因に遡及することなく、この世的な事物や現象を、それ自身から認識することが可能になったことを意味している。社会変動の深刻な経験と、そこから生まれた世俗化の問題は、神学的テーマの一つになった。つまりは、これらの問題の奥底には、この時代変動に対する新しいキリスト教的責任が立っていると思われる。そこで、私たちの聖書の使信はプロテスタント神学の伝統的遺産を継承しつつ、時代の課題に立ち向かわねばならないのである。

「世俗化」という現象は、もはや変更しえない歴史過程の帰結である。それに対して、防衛的な態度を捨て、コミュニケーションによって変動過程そのものの中に飛び込もうとする試みも、しきりであった。神学的にも、従来の「世俗化」の検討と修正によって、精神史の解釈を試みる者も現れた。ここで問われたのは、私たちに与えられたこの世に対する新しい関係の中での、人間の自由と責任であった。それは、世俗化＝この世の非魔力化の歴史を通して、キリ

スト教は、今日、どのような役割を果たすか、ということである。

キリスト教の信者の立場からすれば、文化が世俗的であるように、この世をその本来の世俗性に保って、神の創造とは無関係なものとみなすことにより、人間が全く自由に処理し得るという自己理解を防ぐことでなければならない。

その時に、キリスト教自身が、社会変動への能力も決意も持たず、世俗化の現象に対しても積極的な対応を怠ったらどうなるのであろうか。

「現代は神という〈作業仮説〉なしに、あらゆる重要問題を、自分自身の手で処理することを学んだ時代である」と言ったのは、ボンヘッファーであった。彼によれば、現代社会にとって、神は現実的に存在するものとは考えられなくなった。人間はその技術的、社会的に創造したものの中で、ただ自分自身とのみ出会うにすぎないと提示した。近代的人間の「成人性」に通ずる発展を、「神からのキリストからの一大離反」としてとらえ、従来のキリスト教的な伝統の護教論は「無意味であり、下劣であり、非キリスト教的でさえある」とした。ボンヘッファーは、私たちに「いかにしてキリストを成人した世界において告知し得るか」と問うていたのである。なぜなら、現代の社会にあっては、神は現実的に存在するものとは考えられなくなっているからであらう。

ボンヘッファーの「世俗世界」においても、イエス・キリストは「真に、この世の主」である。キリスト教的なものとは、「イエスの存在に対する参与」から生じてくるもので、彼は、それを「他者のために生きる新しい生活」と考えたのである。

キリスト者が、「この世的に生きなければならない」という課題は、その意味からして、この「成人した世界」の中で、キリストに従うことによって、「キリストの現実性」を証しすることにほかならないのであろう。

さとう・まさはる（所員）

## 小野忠信先生のこと

尾畑裕

この度、キリスト教研究所の所員にさせていただきました。憧れのキリスト教研究所所員になることができ、大変嬉しく思います。私は会計学が専門で、会計学入門や簿記の授業の中でキリスト教と会計について1回分の授業枠を割り当てて話すことはあっても、本業としてキリスト教を研究しているわけではないので、所員にさせていただくのは難しいと思っておりました。しかし、幸いにも李 惠源先生や植木 献先生の推薦を得て、所員にさせていただくことができました。

ここでは、キリスト教研究所の創設に深く関わった小野忠信先生（1998年没）のことを取り上げたいと思います。小野忠信先生は、『アンセルムスの神学』などの著作のあるキリスト教学の先生で、1952年から、1984年まで32年間に渡り明治学院大学に在職されました。

今から34年前に私が日本基督教団富士見町教会で受洗した頃、小野忠信先生は、富士見町教会の長老をされておりました。その当時、小野先生はすでに明治学院大学を定年退職されていて、宮城学院の学院長になられたころかと思っています。手元に、古本屋で入手した明治学院大学一般教育部学会発行の『小野忠信教授定年記念論文集』（以後『記念論文集』と略します）という1冊の本があります。この本は、小野先生と特に関係の深い方々が小野先生との思い出を随想として寄稿されていて非常に興味深い本です。小野先生ご自身が執筆された「キリスト教研究所の歩みと共に」という文章も収録されています（『記念論文集』、22-29ページ）。ご本人が寄稿された文章が、キリスト教研究所に関するものであるところから、小野先生のキリスト教研究所への深い思いを見てとることができます。

この小野先生の文によると、キリスト教研究所の設立は非公式の設立と公式の設立の2回あったようです。1度目は、1952年6月9日に当時の村田四郎学院長兼学長を囲む研究会的グループが研究所となったもので、学院や大学の組織の1つとして制度化されたものではありませんでした。

2回目は1966年4月に正式に文学部の附属研究所として誕生した時です。当時、文学部に神学科を設置するという話があったそうです。明治学院はその前身の1つである東京一致神学校の流れを汲む神学部を有していましたが、17年間明治学院の教授をされていた植村正久が明治学院を辞めた後に設立した東京神学社と1930年に合併して日本神学校になりました、それ以後神学部のない大学になりました。小野先生の文書に次のようにあります。「すでにひとたび学院神学部を、東京神学社（植村正久主宰の）との合併により日本神学校（現在の東京神学大学）として捧げた明治学院が、今になってもう一度大学の神学科を持つことの理由は何かといったようなことが教授会で論議の中心となり、明治学院としてはその方の使命は終わったのだという多かたの認識のもとに、この問題に終止符が打たれたのであります。タイミング的にはその代償のような形で、1966年（昭和41年）4月キリスト教研究所が文学部の付属の研究所として誕生しました。」（『記念論文集』、24ページ）。

このキリスト教研究所の初代所長は、園部不二夫教授で、小野先生は、研究所主事に就任し、9年間主事を務められ、さらに定年までの3年間はキリスト教研究所の所長を務められました。この9年間は非常に印象深いとおっしゃっています。

小野先生は、横浜のチャペルの設計にも大きく関わったそうです。『記念論文集』に収められた企画室長をされていた大沢義信先生の「プロフェッサー・チャペル」（『記念論文集』、158-159ページ）という随想が興味深いものです。横浜への一部移転の際にチャペルの建設が後回しになることが決まっていたそうですが、小野先生が宗教委員長に就任するやいなや第1期工事に繰り入れることを主張し、それが認められたとのこと。そして当初の設計に否を出し、学院長を中心にチャペル建設委員会を構成し、佐藤伸利氏のアドバイスを仰ぎ、教会建築の見学と研究を重ね、小野先生の定年後になりますが、私たちが今見ている斬新な美しいチャペルが完成したのでした（『記念論文集』、158-159ページ）。また、横浜校舎内の橋を、明治学院校歌からとって「遠望橋」と名付けたのも小野先生との話が三浦雅

夫先生が書かれた随想の中に出てきます（『記念論文集』、176 ページ）。

小野先生は、定年までの3年間宗教委員会の幹事をされていました。宗教委員会の活動をさらに強力なものにするために宗教部を設置し、そこに宗教部長と副部長を置き、白金と横浜に配置するような組織を提案され、小野先生の定年退職と同時に、1984年に宗教部ができました。私は2024年より宗教部長を務めておりますが、その宗教部の基礎を作られたのが小野先生であったと知り、非常に感慨深いものがあります。そしてその宗教部は、来年度2026年度より、42年続いた宗教部の名称に終止符をうち、キリスト教センターとして新たなスタートを切ることになります。

おばた・ひろし（所員）

## 雑録

田中祐介

きたる2026年度にサバティカル（研究専念期間）を取得することが認められた。本学の教員として所定の年数を勤務すると申請の権利が得られるが、私が奉職した当初は任期付きの専任であり、サバティカル制度の対象外であったため、今回が初めての取得となる。

海外の研究機関に所属して、語学の研鑽を積みながら、視野を目一杯広げて一年間を過ごす。サバティカルにはそんな漠然としたイメージを持っていたが、いざ取得すると、海外に滞在する利点が思いつかなくなっていた。円安と物価高騰により何かと窮屈な経済生活を送りそうだ。国際情勢も不安定化の一途を辿っている。そして何よりも、進み始めた複数の出版企画が目前にある。じっくり腰を据えて取り組むために、今回のサバティカルでは海外滞在は申請しなかった。史料調査や研究交流で近隣諸国に出張滞在する機会は少なからずあるだろう。それで十分であるとの判断もあった。

出版企画のひとつは、私が代表を務めた国立歴史民俗博物館の共同研究（基盤研究）「近代東アジアにおけるエ

ゴ・ドキュメントの学際的・国際的研究」（2022-2024年度）の成果に基づく研究論文集である。私は近年、近代日本の「日記文化」に関する研究プロジェクトを進め、成果を公開してきたが、「エゴ・ドキュメント」は日記のみならず、手紙、作文、手記、回顧録、自伝などを含む個人文書の総称である。この概念に賛否があることも承知の上で、戦略的に採用することにした。

日記で綴る自己とは、基本的には今日や昨日など、ごく近接した過去の自己である。それに対して手記、回顧録、自伝が綴る自己とは、時間的懸隔のある過去の自己である。語る自己と語られる自己の距離が遠ざかれば、記憶・忘却・想起の働きにより、自己は物語化を伴いながら再構築される。そのような自己の記録を歴史の証言として取り扱うには、日記とは異なる研究上の作法が必要となる。考えてみれば当たり前のようなことも、上述のプロジェクトを実施することで自分の関心事として深く刻まれた。その成果を、個人文書の可能性に関心を持つ方々がまず手に取る一冊として結実できるよう、尽力して取り組みたい。

サバティカルの取得により、当研究所の主任職も離れることになった。気づけば実に5年間にわたり主任として研究所の運営に携わるようになった。着任初年度の2021年度は、新型コロナ禍により研究所は閑散とし、研究会等の企画もほぼ全てがオンラインだった。「アジアキリスト教歴史文化講義シリーズ」（2021年度）、「アジアキリスト教講義シリーズ」（2022年度）もオンライン開催であった。今日では後継の「アジアキリスト教講座」を筆頭として対面開催に復帰し、他の企画でもハイブリッドを活用していることを考えれば、隔世の感がある。

在任中に学内外の仕事が急増したことで、運営業務ではご迷惑をおかけした局面も多々あった。歴代所長の徐正敏先生、坂口緑先生、久保田浩先生、そして教学補佐をお務めになられた高橋英里さん、海老沼里実さんにはお詫びとともに、心からの感謝をお伝えしたい。そして在任期間にお世話になったすべての方々へ心底からの御礼を申し上げます。この5年間を振り返り、少なくとも私個人の経験としては、まず思い出されるのが関わった方々の笑顔であ

る、と何の照れも躊躇もなく言えるのはとても幸せなことだ。

来年度からは執行部も改まり、新たな運営体制となる。研究所の活動が一層充実することを願っている。最後の雑録が個人的な事柄に終始して恐縮であるが、主任職を離任するにあたっての所感としてお赦しいただきたい。

たなか・ゆうすけ（主任）

研究活動（2025年12月～2026年3月）

明治学院大学キリスト教研究所3月研究会

開催日時：2026年3月7日（土）14：00～17：15

開催場所：白金校舎本館9階92会議室

司会：田中祐介（研究所主任）

発表①：教理書の翻訳・出版から見た19世紀東アジアの  
キリスト教用語の流通と形成

発表者：李惠源（研究所所員）

コメンテーター：黄イエレム（研究所協力研究員）

発表②：日本人女性キリスト者と帝国への帰属意識

発表者：ギャレット・ワシントン（研究所協力研究員）

コメンテーター：小檜山ルイ（フェリス女学院大学学長）

新着図書

- ・『福音と世界』No. 1、新教出版、2026。
- ・『福音と世界』No. 2、新教出版、2026。
- ・『福音と世界』No. 3、新教出版、2026。
- ・『キリスト教教育思想の形成』小川智瑞恵著、六花出版、2026年。

---

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第99号

---

2026年3月17日 発行

明治学院大学キリスト教研究所  
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37  
TEL:03-5421-5210 / FAX:03-5421-5214  
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

---

題字：澁谷 浩